

「髪がっなく物語」を読んで

盛岡白百合学園中学校

二年

高橋

希

私は生まれ、一度も髪にはサミを入れたことがない。私の髪は癖がとっても強い。私が幼い頃の写真を観ると、短いのが為に毛先は方々に向き、くしを入れても整えようがない程格好がっかないことが判る。それを不びんに思った両親が髪の毛を長く維持することです。その癖を少しでも自然に見せることができたらと。

いねば親心。今では髪が長いことが私の特徴の一つとなっていて。それでも鏡の前に立つと「ああ切りたいな」と「せめてこんな髪型に出来たらな」と思うことがしばしばある。私はこの本で「ヘアドネーション」という言葉を初めて目にした。「ヘア」髪「ドネーション」寄付し、という意味だ。アメリカでは結構当たり前前に知られているが、日本ではまだマイナーな社会貢献事業の一つ。髪の毛を寄付して医療用のウィッグを作成する。髪の

毛を寄付する相手は、てっきり抗癌剤の副作用で髪が抜けてしまった成人の女性と思つていたら、小児癌の治療で髪の毛を失い、無毛症に悩む十八才以下の子供達だった。医療用のウィッグは三十一センチ以上の髪の毛の長さがある条件。一人分のウィッグを作るのに二、三十人分の髪の毛が必要だという。髪の毛の質よりは長さが大事。成長に合わせてウィッグも新しいものが必要になる。だから常にドナーは不足している。寄付によつて出来上が

るウィッグの数はそれを必要としている人達の数よりまだまだ少ないのだ。

「ヘアドネーションをおばあさんから聞いた美空は自分の髪の毛が役に立つことを知る。そしてその実情を知る。私はまさしくこの美空の気持ちだった。髪の毛を失った患者さんの気持ちをくみ取ることが出来なかった。私は恥ずかしくなつた。自分の髪型が決まらない。思い通りにならないことに悩んでいる自分は何んてつまらないことになつたかわかっている

たことか。自分の髪の毛に對して過大な愛情を抱いていた訳ではないが、ヘアドネーシヨニという言葉を知り、違つた意味で自分の髪によい感情を抱くことが出来た様な気がする。私の髪の毛が必要とされている人の為に活かされるのだ。私から離れた髪の毛が愛され続けられることに特別な思いが持てる。そんな感じがする。

サッカークー少年の仁君が自らの髪の毛を伸ばし、ヘアドネーシヨニに協力するエピソード

からは、信念を曲げずに貫く姿勢を学んだ様な気がする。他人から奇異な目で見られても信念を失して目的があるから平気なのだ。それに比べて、私はいかに他人の目やどう思われたいのかを気にしていたことか。私は自分以外の誰かの為に具体的に何かをしてきたかと考えるときまずい気持ちになる。

社会には様々な貢献事業がある。献血、臓器移植の意思表示、骨髓バンク登録等。私自身はまだどれ一つ十分な理解はないが、今回の

へ了ドネーションは現時点で私は全ての条件を満たしている。むしろ私のような髪の長さを持つ人間は限られているのだ。地元盛岡でそのような取り組みをしている美容室は一軒だけある。母も髪が長い。母と一緒にへ了ドネーションをしてみようか。へ了ドネーションを実行している人達全てが使命感というより、自分が役に立つこと、貢献できることに意義を見出したに違いない。

世の中の事業や職業の一つ一つをみれば

人が人の為に何か働きかけることで成り立っている。お互いを助け、支えることが人の役割であり、それが人としての存在意義。生きる真の目的なのだ。今、私はその目的を達成する為の準備期間を過ごしている。私の日々の修学は将来私が自分以外の人達の為に修学によって得た能力を活かす目的がある。髪が伸びるまでには十分な時間を必要とする様に、私の能力が人の役に立つ日が来るまでの時間を有意義に費やしていきたいと思う。